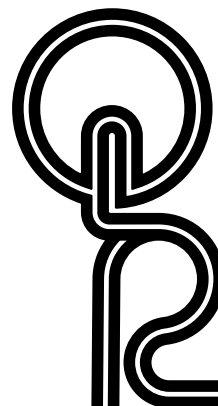


QR Newsletter

第四紀通信

Vol. 9 No.6, 2002



研究委員会合同企画『南関東のローム層を見直す』の野外巡検風景・相模原市下溝，立川・武蔵野ローム層の露頭観察。(鈴木毅彦撮影)

Vol. 9 No. 6

December 1, 2002

| | |
|---------------------------------|----------------------------|
| 合同大会・INQUA・2003年大会情報 2 | 学術会議の改革問題.....10 |
| 講習会報告..... 3 | 2002年度第2回幹事会議事録11 |
| シンポジウム等の案内.....6 | 会員消息.....11 |
| 第18期第7回第四紀研連報告.....10 | |

地球惑星科学合同大会運営機構からのお知らせ

[1] 2003年合同大会日程・会場決定！

会期 2003年5月26日(月) - 29日(木)4日間
会場 幕張メッセ 国際会議場

共催・協賛学会の皆様へ
連絡会ニュースNo.25(2002/08発行)から変更になっております。ご注意ください。詳細はNo.26(2002/10発行)をご覧ください。

[2] 2003年合同大会WEB公開!

この度、2003年合同大会用のWEBを公開いたしました。ぜひご覧いただきますようお願い申し上げます。2003年合同大会トップページ URL:<http://www.epsu.jp/jmoo2003/>

[3] 個人情報登録について

email- アドレスに変更はございませんか？
登録内容が古い場合、こちらの情報をお届けできないケースが増えております。

登録内容に変更があった場合は、大会ホームページの「個人情報登録(新規・変更・検索)」より最新情報にご訂正ください。ご協力をお願いいたします。

[4] セッション提案募集開始! (2003年プログラム委員会より)

ユニオンセッション・スペシャルセッション提案募集を9月24日から開始しました。
提案および詳細につきましては、2003年大会トップページの「セッション提案」をご覧ください。
又、「セッション情報」では現在2003年大会で開催されるレギュラーセッションの一覧をご覧になれます。ここでは、リアルタイムに提案いただきました全セッションが確認できます。ご提案時のご参考にしてください。
尚、セッション提案募集の締切は
ユニオンセッション：10月8日
スペシャルセッション：11月8日の予定です。

(第四紀通信の刊行時期の関係ですすでに締め切りを過ぎております。申し訳ありません。)

2003年のINQUA大会のお知らせ

第16回国際第四紀学連合大会(INQUA)は来年7月アメリカで次のように開かれます。ぜひご参加下さい。
なおサーキュラーは配布されず、ネットで情報をみて申し込む方式になっています。ご注意ください。

開催年月日：2003年7月23日～30日
開催地：Reno Hilton Resort Center, Reno, Nevada
主テーマ：Shaping the Earth: A Quaternary Perspective
各種申し込み締め切り
登録、登録料締め切り：2003.1/31(一般\$250, 学生\$150, 同伴者\$50) 2003.6.30
(一般\$400, 学生\$200, 同伴者\$50)
野外巡検 アラスカ(2002.12/15)を除き, 2003.3/31
アブストラクト：2003.3/31
宿泊予約：2003.6/22
詳しいことはネットにアクセスして下さい。 <http://inqua2003.dri.edu/>

日本第四紀学会 2003年大会(第1報)

一般研究発表・総会・シンポジウム：8月29日～31日 会場：大阪市立自然史博物館
普及講演会：8月31日 会場：大阪市立自然史博物館
野外見学会：9月1日 見学内容：大阪南部の大阪層群の地層および大阪平野の沖積層における堆積物と遺構

第8回日本第四紀学会室内講習会

「湖沼・内湾・レス堆積物コアの解析法」参加報告(1)

酒井哲弥(島根大学・総合理工学部)

まさに「コアづくし」の講習会が開かれた。2002年10月13,14日の両日、東京都立大学にて第四紀学会室内講習会「湖沼・内湾・レス堆積物コアの解析法」が同大理学部地理学教室の環境変遷学研究室の主催で行われた。この講習会は8月22日に行われた野外講習会に引き続いて開かれたものである。野外でのコア採取とその分析法の室内実習がセットとなった講習会であったこと、そして現在、日本各地のみならず、世界各地のコアを使って精力的に研究を進めておられる福澤仁之さんのグループが講習会の主催ということも手伝ってか、多数の参加希望があった。当初は10月13,14日のみの講習会であったが、11月以降に追加の講習会が行われるとのことである。なお、野外講習会については、すでに第四紀通信 vol. 9 no. 5 で堀和明さんによって報告がされているので、そちらを参照して頂きたい。

講習会への参加者は全部で14名であった。講習会初日は午後から福澤さんと信州大学の公文富士夫さん、環境変遷学研究室の山田和芳さん、加藤めぐみさん、小森次郎さん、松尾政規さん、川上郁夫さん、国際日本文化研究センターの藤木利之さんを講師とする講義が行われた。翌日は朝から前日の講義をうけて、コアの記載例の紹介があったほか、解析用の試料作成とその分析、薄片などの観察を行った。一部の分析項目についてはそのデモンストレーションが行われた。

初日の講義は、(1)コア解析法の概略(福澤)、(2)湖沼・海洋堆積物のコアの記載(小森)、(3)湖沼・レス堆積物コアの解析(山田)、(4)コアおよびセディメントトラップ試料の珪藻分析(加藤)、(5)コア試料の花粉分析と電子顕微鏡による種同定(藤木)、(6)コア試料の貝化石同定(川上)、(7)コア試料の環境磁気分析(松尾)、(8)コア試料から何がわかるか(その1)(福澤)、(9)コア試料から何がわかるか(その2)(公文)という内容で行われた。前半7つの講義では具体的なコアの記載方法、機器分析のための試料の準備法、測定方法という基礎的なことから、良いデータをとるためのコツ、そして国際的に評価されるためのデータをいかにとるかという先端的なことまでを、わかりやすく解説して頂いた。後半2つの発表は具体的にコア試料の解析から得られたデータの紹介から、実際に福澤さんたちのグループや公文さんたちのグループが解析をして復元した過去の気候変動、モンスーン変動のトリガーに関するこれまでの研究が紹介された。これらの講義を通じて、コアの一次記載をし

かりすることの重要性、そして、取りたてほやほやのコアを素早く“調理”することがより質の高いデータを得るのに大事であることを改めて再認識させられた。

2日目の実習の主な項目は、初磁化率測定、物性(乾燥容積比重・孔隙率・粒子比重)の測定、スミアスライドの作成・観察、珪藻観察用のスライドの作成・観察、コアの薄片観察、色の測定、有機炭素量の分析を実際に行った。X線を使用する分析(軟X線写真の撮影、X線粉末回折分析、蛍光X線分析)については分析等のデモンストレーションが行われた。

それぞれの作業ではコアや分析装置を前に、原理から試料の作成手順、分析方法に至るまで詳しい解説があり、その後、実際に参加者が作業を行った。分析の原理などについては参加者からもさかんな質問があった。さらに今回の講習では、テキスト通りの方法をそのまま解説するだけでなく、福澤さんたちがこれまでに作り上げてきたノウハウや、作成した試料から定量解析を行う上での問題点などの解説もあった。どんな作業にでも言えることだが、その作業の問題点やよりよいデータをとるためのノウハウは実際にやってみないと知ることはできない。実際、1つの珪藻分析用試料をつくるにも、試料を観察範囲の中にまんべんなく分散させなければ精度のよいデータを得ることができない。紹介された良い試料をつくるためのテクニックの数々には驚かされた。気候変動の解析が高精度になればなるほど、良いデータを取るためのテクニックや方法の改良が重要になることを、身をもって感じさせられた。

今回の講習会は湖沼・内湾・レス堆積物コアの解析法というタイトルではあるが、実習の内容は海洋からのコアや地表に露出する堆積物に適用できるものである。ご承知のように2006年度には日本の深海掘削船が運行を開始する予定である。IODPには日本からは多くの研究者が参加するようになるため、より多くのコア解析能力を身につけた人材が要求される。海洋学の分野などでさかんに将来を見据えた研究会等が行われているように見受けられる。が、学問的な議論を深いものにするためにもその前段階として、今回の講習会で行われたような、サンプル採取から試料の処理、分析、観察の作業を体験し、自分の手で得たデータから何が読めるか、どこにその方法のメリット、デメリットがあるか、といったことへの理解を深める必要があるのではないかと強く感じた。今後、このタイ

この講習会がさかんに行われることを強く望む限りである。

今回の一連の講習会はコア試料を取る現場から室内での試料分析を一通り経験することのできる、ユニークな企画であった。特にこの2日間は粗粒な堆積物ばかりを相手にしている私にとっては、細粒堆積物からなるコアの詳しい解析法を学べたという点、解析法を学んだこと

で、古気候のプロキシデータにそれぞれどういうメリット、デメリットがあるのかを知ることができたことが非常に大きかった。2日間をかけての室内講習会であったが、実際の作業は駆け足で行われたため、より理解を深める意味で、もっとじっくりと時間をかけて講習を受けたいという思いが残った。最後に講習会を実行してくださった、都立大の福澤さんをはじめとする皆様方に心から感謝の意を表したい。

第8回日本第四紀学会室内講習会

「湖沼・内湾・レス堆積物コアの解析法」参加報告(2)

深見池の感動から環境データ・アーカイブまで

樋口茂生(千葉県環境研究センター)

[フィールドワーク]

8月22日深見池におけるコア採取(第四紀通信 Vol.9, No.5の写参照)は、非常にダイナミック且つ感動的であり、コアのリズミカルな年縞には、神秘ささえ感じさせるものがあった。そして、「このコアから果たしてどんな情報を、どのようにして引き出すのか?」を知りたかった。

[室内講習]

10月13~14日に、コアの秘めている情報の引き出し方を勉強した。まず、半日かけて講義:「コア解析」があり、2日目に丸一日実習:「コアの記載・分析法」がおこなわれた。1)コア解析法の概略 2)湖沼・海洋堆積物コアの記載 3)湖沼・レス堆積物コアの解析 4)コアおよびセディメント・トラップ試料の珪藻分析 5)コア試料の花粉分析と電子顕微鏡による種同定 6)コア試料の貝同定 7)コア試料の環境磁気測定 8)コア試料から何がわかるか?



写真1: 初磁化率測定



写真2: スミアスライド作製

[学んだこと]

それは、あらゆる観察結果がデータとして科学的、定量的にストアされること(1次記載と呼ばれる)である。例えていうと、職人ひとりの感だけでやられていた仕事が、マニファクチュアではないが、誰がやっても(実際には難しいが)一定のレベルで記録できるようにプログラムされている感じである。機器分析は勿論であるが、色の数値化や年縞をPCで数値化して読むなどはその代表的な作業である。

[気候変動のトリガーは?]

この研究は何を最終目標にしているのだろうか?それが、1日目の講義の中でわかり易く話



写真3：分光測色計



写真4：描画装置付き実体顕微鏡による観察

された。綿密な計画にもとづいたフィールドワーク、室内の詳細な記載・分析、そしてこの地球規模のテーマがそれぞれのレベルで系統的に構成されており、興味も多次元に広がった。

[未来]

講師陣の一連の研究は、フィールドに根ざしており、年縞堆積物の時間軸でも、環境質でも高分解能な情報を基礎にしている。この講習会は、蓄積した技術の普及が大きな目的だが、ここまで積み上げに割いてきた時間を、今後ストアされた情報の総合や、より質を究めるために使いさらなる飛躍を期待したい。また、講習会の参加者が裾野を広げるべきことは言うまでもない。野外同様、室内でも良いチームワークで、これは研究に欠かせない要素であるし、これが大きな力になっているのを感じた。

[感謝]

講習会を準備された福沢仁之氏をはじめとするメンバーの方々に心から感謝申し上げます。貴重な時間を割いての懇切丁寧なご指導には、ただただ頭の下がる思いである。

写真については講習会の雰囲気伝えるものとし、特に分析機器は割愛した(山田ほか、1998：汽水域研究、5,63-73参照)。



写真5：珪藻分析(吸引濾過による方法)

北淡活断層シンポジウム 2003

「21世紀の海溝型巨大地震を探る」

主催：北淡活断層シンポジウム実行委員会（委員長：加藤茂弘，事務局幹事：川吉知子）
共催：活断層研究会，兵庫県立人と自然の博物館，兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
後援：兵庫県教育委員会，北淡町・北淡町教育委員会・株式会社ほくだん，日本応用地質学会関西支部

1. 開催場所：兵庫県津名郡北淡町・震災記念公園セミナーハウス
2. 日時：2002年1月16日（木曜日）午後1時から1月17日（金曜日）午後1時20分頃まで
3. 宿泊場所：北淡町自然休養村センター（小型バス送迎）・周辺の民宿（徒歩）
4. 旅費は発表者，若手研究者に優先支給，一般聴講者は原則自費，科学研究費の関係者はその経費で。
5. 一般ポスター発表者を公募する【期限：12月22日までに申し込むこと 北淡町教育委員会生涯学習課・川吉知子宛，なお発表要旨は申し込みと同時に送付のこと】
6. 参加希望者【12月22日までに申し込むこと 北淡町教育委員会生涯学習課・川吉知子宛】
7. 予稿集締め切り【期限：12月22日，写真製版用の原稿は北淡活断層シンポジウム実行委員会事務局：川吉知子宛に，メールやフロッピーによる原稿は加藤茂弘宛（katochan@hitohaku.jp）にお送り下さい。】

予稿集原稿はA4サイズで2頁または4頁，第四紀学会予稿集に準拠（上余白：30mm，下余白：35mm，左右余白：25mm，タイトルの前15mm余白，タイトル(コゝチ)，氏名(所属)，英文タイトル，本文は1行漢字35文字，1頁36行を目安とする（第四紀研究40巻1号や会員名簿巻末参照）。

第四紀学会の様式がおわかりにならない方は，原稿はテキストファイルで作成し，メールまたはフロッピーで，図版は割付を指定して加藤茂弘宛に送れば，事務局で第四紀学会予稿集に準拠して作成します。その時1ページは1行35文字，1頁36行を目安に作成してください。図版は原図に限らず 鮮明なコピーを送付して頂くか，pdfもしくはj-pegファイルにてフロッピー，CD-ROM，ないしMOにて送付ください。2メガバイト未満のデジタル図版であればメールにて送付頂くことも可能ですが，それ以上の図版は上記の媒体にて加藤茂弘宛に送付ください。

8. シンポジウム予定（講演者・演題は変更になる場合もあります）

第1日：2003年1月16日（木） 午後1時～午後4時50分

- ・活断層シンポジウム 2003 「21世紀の南海地震を探る 地震災害の軽減に向けて」
21世紀半ばまでに発生する可能性が高いといわれる南海地震。過去の南海地震をふりかえり，次の南海地震の発生時期や近畿圏での揺れと津波の規模を予測するとともに，地震・津波災害への備えを考えます。

開会あいさつ 井高孝一（北淡町長） 1：00～1：10

講演1 繰り返す南海地震 - その発生の歴史：寒川 旭（産業技術総合研究所） 1：10～1：50

講演2 南海地震発生の長期的予測：島崎邦彦（東京大学地震研究所） 1：50～2：30
（休憩15分）

講演3 想定南海地震による近畿圏の強振動：入倉孝次郎（京都大学防災研究所） 2：45～3：25

講演4 津波災害にどう備えるか - その予測と対策：今村文彦（東北大学大学院工学研究科災害制御研究センター） 3：25～4：05

質疑・応答 4：05～4：45

閉会あいさつ 境 茂（北淡町教育長） 4：45～4：50

- ・ポスターセッションのポスター設置 5：00～6：00
- ・懇親会（レストラン「さくら」にて，希望者のみ） 6：00～8：00
- ・8：00～ 宿泊地へ移動（休養村・その他の民宿）

第2日：2003年1月17日（金） 午前9時～午後1時20分

(1) ポスター・展示紹介 9:00 ~ 10:00

(休憩 10分)

(2) 学術シンポジウム「海底活断層と地殻変動」 10:10 ~ 13:20

海底活断層の性状や、その活動に起因する地震や地殻変動についての研究の現状を紹介するとともに今後の課題を整理し、21世紀の海底活断層研究を展望します。

司会進行 : 堤 浩之 (京都大学)

話題提供者:

10:10 ~ 10:35 都司嘉宣 (東京大学地震研究所): 歴史史料からみた海溝型巨大地震

10:35 ~ 10:55 前杵英明 (広島大学): 室戸半島の隆起と海底活断層

10:55 ~ 11:15 岡村 眞 (高地大学): 海底活断層を探る - 別府湾やトルコの活断層を例に -

11:15 ~ 11:40 七山 太・活断層研究センター (産業技術総合研究所): 堆積学的手法に基づく海底断層の活動性評価

11:40 ~ 12:15 平川一臣 (北海道大学): 津波堆積物から探る北海道太平洋岸を襲った過去の巨大津波

(休憩 15分)

12:30 ~ 13:15 総合討論

13:15 ~ 13:20 閉会あいさつ 松田時彦 (地震予知総合研究振興会)

昼食: 午後1時30分 ~ 2時 (希望者のみ)

・セミナーハウスでのポスターセッション展示

初日午後1時 ~ 2日目午後1時30分 (13:30以降に撤収・希望者のみ)

ポスター掲示は初日午後1時までと午後5時 ~ 6時までの間をお願いします。

ポスター寄贈者分については1ヶ月ほど掲示します。

・特別展示: 1月16日(木) ~ 2月18日(火)

活断層トレンチはぎ取り断面 (琵琶甲断層・草谷断層), 噴砂・液状化跡のはぎとり断面, 鯨絵・瓦版など。

予稿集・発表申し込みなどは

北淡町教育委員会生涯学習課・川吉知子宛

〒656-1736 兵庫県津名郡北淡町小倉177

北淡町震災記念公園セミナーハウス内

電話 0799-82-3400, Fax 0799-82-3401

E-mail: kouen@rhkd254.town.hokudan.hyogo.jp

もしくは、兵庫県立人と自然の博物館・加藤茂弘宛 (メール・Faxにてお願いします)

〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6

電話: 0795-59-2017, Fax: 0795-59-2017

E-mail: katochan@hitohaku.jp

地球惑星科学合同大会堆積系セッションの発表募集について

来年開催の合同大会で、堆積系セッション(昨年までの「堆積物と堆積作用」)のコンビーナーになりました。昨年はエントリー数が規定に達せず開催できなかったため、セッション名も「堆積物・堆積岩から読みとる地球表層環境情報(堆積と表層環境)」として、第四紀学会関係者にも広く発表を募りたいと思います。「堆積と表層環境」の内容説明文を下記に示します。

「堆積物・堆積岩からその形成過程を読み取り、地球表層環境を復元する。陸成から深海成まで、現世から先カンブリア時代まで、砕屑岩から炭酸塩岩・有機質岩まで、堆積物・堆積岩の形成に関する研究発表を行う。また堆積盆の形成プロセス、堆積物の続成作用、実験的研究なども積極的に取り上げる。これらの議論に関して、地形学的、生物学的、海洋地質学的、地球物理学的、地球化学的観点からの切り込みを大歓迎する。」

白井正明 (東京大学海洋研究所海洋底科学部門) 〒164-8639 東京都中野区南台1-15-1

電話: 03-5351-6559 FAX: 03-5351-6438 e-mail: shirai@ori.u-tokyo.ac.jp

「火山の国日本の箱根シンポジウム」

主催：箱根火山シンポジウム企画実行委員会*
共催：日本地質学会・全国火山系博物館連絡協議会

* 委員会メンバー：高橋正樹（委員長，日本大学文理学部）・伊藤和明（全国火山系博物館連絡協議会代表）・三松三朗（三松正夫記念館）・柴 正博（東海大学自然史博物館）・阿部国広（日本地質学会学校教育委員会）・会田信行（千葉県立佐倉東高校）・池辺伸一郎（阿蘇火山博物館）・佐藤 公（磐梯山噴火記念館）・小山真人（静岡大学教育学部）・小林 淳（ダイヤコンサルタント）・先山 徹（兵庫県立人と自然の博物館）・赤羽久忠（富山市科学文化センター）・三田直樹（産業技術総合研究所）

[趣意書]

箱根火山は、日本を代表する大型の活火山であり、50万年にもわたる長く複雑な噴火の歴史をもっています。しかし、幸いなことに最近の火山活動はおおむね穏やかであり、太古の噴火がもたらした美しい景観と、地下のマグマの熱がもたらす豊かな温泉によって、箱根火山とその周辺地域は国際的な観光地として古くから繁栄してきました。

箱根町では、日本火山学会と協力して、火山としての箱根の生い立ちや恵みについての総合的解説書「箱根火山」を1971年に出版しました。また、1972年には箱根町立大涌谷自然科学館を開設し、1981年には国際火山学・地球内部化学会（IAVCEI）を誘致するなど、火山研究の促進ならびに火山と共生する文化の育成を見据えたまちづくりを行ってきました。

箱根町立大涌谷自然科学館は、箱根を訪れる一般市民が箱根火山の形成や箱根の自然について現場での学習ができる施設であり、開設以来30年間にわたって国内外の700万人以上の来館者に対し、自然体験教育の学習資料を提供してきました。また、火山の現場にある博物館として、火山災害についての普及・啓発ではもちろん、火山活動の観測・研究拠点の一つとしての機能も維持し、日本を代表する火山博物館として国内的にも国際的にも大きな役割を果たしてきました。

しかし、残念なことに大涌谷自然科学館は、建物の老朽化などの理由によって、今年度いっぱい閉館することが決定されています。その一方で、2001年夏には箱根火山の地下で一時的にマグマ活動が活発化する事件があり、今年度から箱根町が箱根火山のハザードマップ検討委員会を立ち上げるなど、地元住民の火山への関心が高まっています。

このような状況を鑑み、本委員会では箱根火山の最近の火山研究や防災に関する成果や、箱根町立大涌谷自然科学館がこれまで果たしてきた役割をどう継承するかという問題も含めた火山教育・研究のあり方、火山との共生を目指したまちづくりなどをテーマに、下記のようなスケジュールで「火山の国日本の箱根シンポジウム」の開催を企画しました。

このシンポジウムの内容については、以下に示します。14日はシンポジウムを行い、箱根火山の地質見学会は15日に行います。（シンポジウムについては、事前登録の必要はありません。）

「火山の国日本の箱根シンポジウム」

日時 12月14日（土）午後1時～午後4時30分
会場 箱根町立仙石原公民館（仙石原文化センター）講堂

第一部「箱根火山をもっと知ろう」

1. 箱根火山はどのようにしてできたかー最近の考え方ー：高橋正樹（日本大学）
2. 箱根火山最新期の活動ー神山・大湧谷・芦ノ湖の生い立ちー：小林 淳（ダイヤコンサルタント環境防災事業部）
3. 2001年の火山性地震と地殻変動ー生きている箱根火山ー：講師未定

第二部「火山と人間の共存」 パネルディスカッション形式

コーディネーター：伊藤和明（元NHK解説員）
パネラー：袴田和夫（大涌谷自然科学館館長）
 小山真人（静岡大学教育学部）
 三松三朗（三松正夫記念館館長）

池辺伸一郎 (阿蘇火山博物館館長)

第三部 「箱根火山を見よう」(地質見学会)

日時 12月15日(日) 午前9時~午後4時30分

集合・解散 箱根町立仙石原公民館(仙石原文化センター)

シンポジウムを成功させるための募金活動(一口2000円)も行っておりますので、ぜひご協力ください。

口座番号 00870-2-106433

口座名称 箱根火山シンポ

3rd IAHR Symposium on River, Coastal and Estuarine Morphodynamics の案内

Dear Colleague,

We are very pleased to announce that the 3rd IAHR Symposium on River, Coastal and Estuarine Morphodynamics will be held in Barcelona on September 1-5, 2003.

You will find the call for papers and description of this Symposium at the web page <http://www-ehma.upc.es/rcem2003/index.htm>

We encourage you to submit, before 15 February 2003, your presentation/s in any of the following topics:

- Sediment transport mechanics (in river, coastal and estuarine -RCE-domains)
- Bed-forms mechanics (ripples, dunes, antidunes, bars, ridges, cusps in RCE domains)
- Morphodynamics of lagoons and tidal inlets
- Morphodynamics of river mouths and estuaries
- Evolution of river and coastal forms (meanders, braids, plan and profile evolution)
- Slope instabilities and submarine morphodynamics (turbidity currents, debris flows)

If you wish to continue receiving more RCEM 2003 news just fill in the form "Preregistration" at the RCEM 2003 web site <http://www-ehma.upc.es/rcem2003/preregistration.htm> or replay this e-mail to rcem.2003@upc.es with SUBSCRIBE in the subject

We all (Local and Scientific Committees members) expect to see you in Barcelona on September 1-5, 2003.

Sincerely,

Agustin Sanchez-Arcilla
RCEM 2003, Chairman

Allen Bateman
RCEM 2003, Vice-Chairman

Symposium Secretariat - RCEM 2003
Dept. of Hydraulics, Maritime and Environmental Eng.
Universitat Politècnica de Catalunya (UPC)
Jordi Girona, 1-3, building D-1
08034 Barcelona SPAIN
Fax. +34 93 401 1861
Email. rcem.2003@upc.es

第18期・第7回第四紀研究連絡委員会
議事録

日時：2002年6月7日（金）13：30～16：30
会場：日本学術会議第4部部会室
出席：町田洋 岩松暉 小泉格 斎藤文紀 奥村晃
史 中村俊夫 小野昭
欠席：海津正倫 坂上寛一 真野勝友 赤羽貞幸
斎藤享治 吉川周作 （順不同敬称略）

報告事項

1. 学術会議（岩松暉報告）：資料あり「日本学術会議の在り方について」（中間まとめ）（2002.4.19）。アカデミー機能とカウンスル機能の両側面を有する科学者の集団が不可欠であるとの意見が出されているが、国際対応や会員の老齢化に伴う問題点などがある（終身制は外した）。
2. 科研費審査委員の推薦 日本第四紀学会と協議の上、層位古生物（一段審査委員）と古文化財（二段審査委員）各1名を推薦した。
3. INQUA招致委員会 WG31名、内幹事7名。委員長 熊井久雄氏、事務局 産総研（活断層）。
 - 1) 統一テーマはExciting Quaternary in Dynamic Areas.
 - 2) 2003年のアメリカ、リノ大会をめざしPR用のCD-ROMを作成する。
 - 3) 2007年にINQUA招致のため立候補を予定しているのは、日本以外ではオーストラリア（ケアンズ）である。そこでは熱帯の第四紀研究が中心テーマになる予定という。
 4. その他 1) 地質科学総合研連は委員構成に手直しをし、シンポジウムを企画するなど助走を開始しつつある。2) IGBPのNewsletterなどには産業革命以降の人類の営みが自然環境に決定的な影響を与えるようになったので、それ以降を、Anthropoceneと呼称していることが紹介され、第四紀研究に携わる者としては無関心でありえないことなどが議論された。

審議事項

1. 2003年のINQUA大会への準備の企画：2007年日本招致のために冊子（CR-ROM版）を作成することを支持する。
2. 研連関連シンポジウム：古土壌・テフラ・ネオテクトニクス・考古の各分野合同で、関東ローム層を見直す企画をたて、現地の巡検とシンポジウムを9月上旬におこなう予定であることが紹介された。また9月9-13日に名古屋大学で行われる国際会議「第9回加速器質量分析国際会議」を共催することにした。
3. 小野 昭委員の長期外国出張（2002年10月1日～2003年9月30日）にともない残任期間中の交代委員の選出について審議した。小野委員は日本第四紀学会から推薦されたので、研連委員長から日本第四紀学会に交代の委員を推薦するよう要請することにした。（記録：小野 昭）

日本学術会議の改革問題

このことについては3年前から政府機関である総合科学技術会議の「日本学術会議の在り方に関する専門調査会」と日本学術会議の「委員会」とが別個に検討を重ねてきて、中間まとめがなされた。現在第19期の学術会議の会員選出作業が続けられているが、上記の検討結果は、会員数の見直し、従来の研究連絡委員会の廃止などを含むので、会員選出に大きな影響を与える。しかも現在、調査会・委員会の見解には一致していない点がある。そこでさる10月29日に、この件について会員、研究連絡委員会委員長、学協会の関係者を召集して検討経過の説明会が開かれた。要点は次の通りである。

- 1) 日本学術会議は、中立的で信頼できる科学的見解を提供する全領域の科学者の集団である（調査会・委員会間で共通）。
- 2) 調査会・委員会間の見解の相違点（以下Aを総合科学技術会議の専門調査会、Bを日本学術会議の委員会の見解として記す）
 - i) 設置形態 Aは独立（検討中）、Bは従来通り国の特別の機関とする。
 - ii) 会員数と選出方法 Aは200～300人程度で現会員による選出し、課題に応じて関係会員を任命する。これに対してBは2,500人程度で210人程度の運営・執行メンバーを互選する。第一に各学協会からの推薦を受け、現会員からなる推薦委員会で選ぶ。

この説明会ではとくに学術会議案Bの利点を説明し、質疑が行われた。各学協会は学術成果を社会に還元する場合種々の方法をもつが、その一つの重要なパイプが学術会議である。しかし第四紀研連は現在会員を選出する枠をもっていない。日本第四紀学会はこのような現状からこの問題を考えていく必要がある。こうした意味から皆さんにお知らせする次第である。なお来年夏は学術会議改革のタイムリミットであり、かつ次期の会員、研連委員選出とも重なりあう。したがって猶予が僅かなので、関係する状況はわかり次第、学協会に連絡することになっている。なおより詳しいことは専門調査会HPをご参照下さい。

(<http://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/gakujutsu/gmain.html>)

町田 洋（第18期第四紀研連委員長）

2002年度第2回幹事会議事録

日時：2002年9月21日(土) 10:30-13:00 早稲
田大学教育学部 16号館 512室
出席：熊井久雄，真野勝友，小野 昭，鈴木毅彦，
山崎晴雄，小田静夫
欠席：福澤仁之，竹村恵二，宮内崇裕，海津正倫，
河村善也，町田 洋，中川庸幸

1. 報告事項

庶務：受入図書(4機関から6冊)の報告。日本学
術会議より学術研究団体登録完了の通知が来たこ
と。第1回幹事会・評議員会と総会の議事録，およ
び会員動向7月分の確認。編集，企画：特になし。
2004年大会の開催地として山形を考えている旨
(会長)。

2. 審議事項

庶務：震災資料のデジタル化に伴う著作権者の承諾
願い(神戸大学附属図書館長)の許可。2002国際
地質環境ワークショップ(2002.11.16-11.21)，火
山の国日本の箱根シンポジウム(12月14日)を後
援することとした。個人のHPにおける自身の講演
要旨の公開について，これを認めることとした。科
研費(研究成果公開促進費)へ応募することとした。
企画：次回ミニシンポジウムを2003年2月1日に
花粉関係のテーマで企画することとした。
その他：50周年記念事業の委員会の立ち上げにつ
いて審議した。旧石器捏造問題に関わり、第四紀学
会の出版物・会誌などの内容を点検する件について
審議し，この問題に関するWorking Groupを立ち
上げることを決めた。書記の手当の問題について審
議した。次回の幹事会を11月9日に開催すること
とした。場所は早稲田大学を予定。

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀学会広報委員会 名古屋大学環境学研究科地理学講座

海津正倫 (e-mail: umitsu@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp)

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Tel : 052-789-2270

Fax : 052-789-2272

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締切, 偶数月 1 日発行予定です

第四紀学会ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/qr/QR2home.htm> で, 第四紀通信バックナンバーの PDF ファイルを閲覧できます。